

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

| | |
|------------|---|
| Title | 館と宿の中世：常陸大宮の城跡とその周辺 |
| Author(s) | 茨城大学中世史研究会 / 常陸大宮市歴史民俗資料館 |
| Citation | |
| Issue Date | 2009-10-10 |
| URL | http://hdl.handle.net/10109/1295 |
| Rights | |

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

館〈たて〉と宿〈しゅく〉の中世

— 常陸大宮の城跡とその周辺 —



茨城大学中世史研究会
常陸大宮市歴史民俗資料館

常陸大宮市発行

序論 ―館〈たて〉と宿〈しゅく〉の時代―

金砂合戦に敗れた佐竹氏は、多くの勢力基盤を失うことになったが、鎌倉時代後期になると、一族を常陸北部に分出し、地域に根ざした支配を展開し始める。南北朝期にはいち早く足利方に味方し常陸守護の地位に就くことによって、佐竹氏の政治的立場は安定したものとなった。一族諸家が、領主として郷や村の中心に屋敷を構えるようになったのも、この頃のことであろう。

室町・戦国時代の戦乱の中で、こうした領主たちは、山や丘等の天然の要害を利用して城を築く。常陸大宮市域では、こうした郷や村の拠点となる城郭の多くが、館〈たて〉の呼称で呼ばれてきた。館〈たて〉は街道や河川交通の要衝に築かれ、根小屋〈ねごや〉と呼ばれる城下の拠点施設を媒介に、宿〈しゅく〉を保護下に置いた。宿〈しゅく〉とは、地域で生活する多様な人々が集まる町場で、政治・経済の中心である。そこでは豊かな文化が育まれ、その多くは、近世の在郷町として継承される。

常陸大宮市域には、こうした館〈たて〉と宿〈しゅく〉に象徴される、中世以来の歴史的景観と文化遺産が、数多く残されている。茨城大学人文学部と常陸大宮市は、地域連携事業として常陸大宮市域の山城跡とそれを囲む歴史的景観に関する調査を進めてきた。平成21年(2009年)10月10日(土)から11月23日(祝)まで、常陸大宮市歴史民俗資料館(大宮館)で開催される「館〈たて〉と宿〈しゅく〉の中世―常陸大宮の城跡とその周辺―」は、その成果を市民の皆様にご覧いただくために企画されたものである。

本書には、そこで展示・公開された常陸大宮の城とその周辺の歴史にかかわる史料についての写真と解説を、地域(旧町村)ごとに収めたものである。本書の刊行が、中世以来、森の自然とともに伝えられてきた常陸大宮市の歴史的景観と文化遺産を見直していただく機会となれば幸いである。

目次

序論・目次・凡例・協力者・協力機関……1 / I 大宮地域……2 / II 美和地域……6 / III 緒川地域……10 / IV 山方地域……12 / V 御前山地域……14 / 常陸大宮市のおもな中世城郭・奥付……15

凡例

- ・図版には、作品番号、作品名称、数量、所蔵、指定名称、年代、材質形状、法量、解説を付けた。
- ・解説は、茨城大学中世史研究会と常陸大宮市歴史民俗資料館(大宮館)とが協力して作成した。文責は以下の通りである。
牡丹健一(茨城大学大学院生) 1～7、10、11 / 高橋修(茨城大学教授) 8、9、22～27 / 長浜叔子(茨城大学学生) 12 / 高村恵美(常陸大宮市歴史民俗資料館主幹) 13、42、57 / 前川辰徳(徳川博物館学芸員) 14～21 / 梅田由子(茨城大学大学院生) 28～32 / 高橋裕文(茨城大学大学院生) 33～41、44～55 / 額賀大輔(茨城大学大学院生) 43、56、58～60
- ・本書の編集の実務には、高橋修と高村恵美があたった。

協力者・協力機関

本書の刊行にあたり、以下の方々に御協力をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

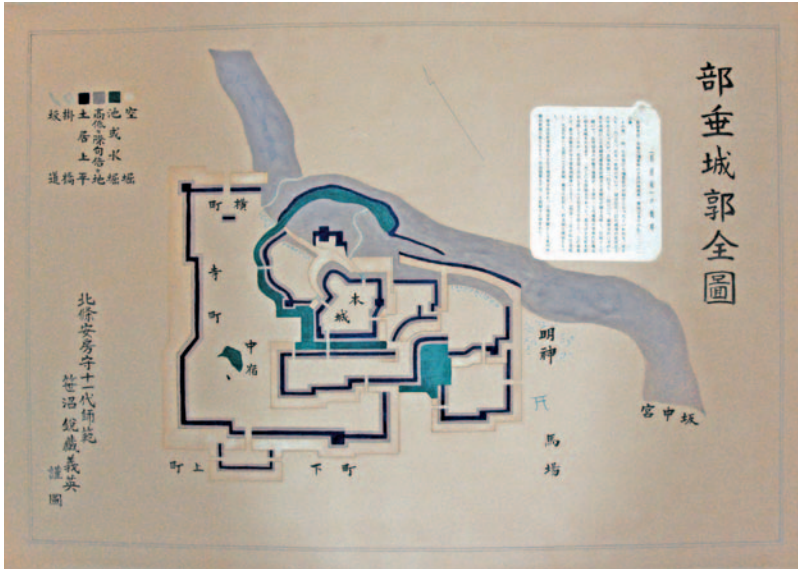
相田くり子 坪正昭 石川毅 伊藤瑠美 内田輝子 内田一 寛博 金子幹夫 高部孝夫 立原正雄
西田市郎 額賀キシ 藤本正行 益子勝子 松平勝男 余湖浩一
一乗院(栃木県那須烏山市) 茨城県立図書館 茨城県立歴史館 茨城城郭研究会 茨城大学人文学部
茨城大学五浦美術文化研究所

茨城中世考古学研究会 大宮郷土研究会 緒川郷土文化研究会 春日神社(岩崎) 甲神社
岐阜市歴史博物館 華蔵院(ひたちなか市) 江畔寺 御前山郷土史研究クラブ 佐伯神社 常安寺
諏訪神社(高部) 諏訪神社(西野内) 善徳寺 立野神社 鷲子山上神社 那珂川町馬頭郷土資料館
常陸大宮市立大宮小学校 日向神社 三浦神社 山方郷土史クラブ 山方ふるさと振興公社 吉田八幡神社
米沢市上杉博物館

表紙の写真 「越後国瀬波郡絵図」 米沢市上杉博物館蔵 / この頁の写真 「賤ヶ岳合戦図屏風」 岐阜市歴史博物館蔵

I 大宮地域

現在の太宮の町並みは、近世に在郷町として整備されたものだが、その起源は、中世、部垂城の周辺に形成された宿に遡る。部垂城と段丘上に並ぶ宇留野城・前小屋城、久慈川と那珂川とを繋ぐ小場城は、部垂の乱に象徴される佐竹一族内乱の歴史を今に伝える。甲神社の寺宝や墓碑にも、当時を偲ぶことができる。



1. 部垂城絵図

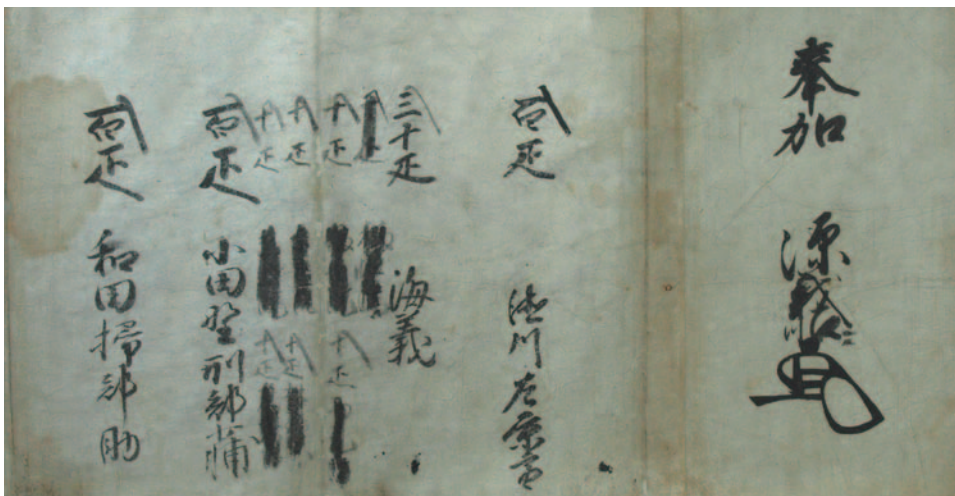
一枚／常陸太宮市立太宮小学校蔵／江戸時代末期～明治時代初期カ／紙本淡彩／縦54.8cm 横76.7cm

古城にあった部垂城の絵図。部垂城は、河崎氏、人見氏が居城した後、長禄年間(1457～60)に小貫頼定が攻略した。享禄2年(1529)、佐竹十七代の義篤の実弟・部垂(宇留野)義元が小貫氏よりこれを奪う。部垂城攻略により義篤と義元との関係が悪化、12年に及ぶ部垂の乱を招くことになる。義元は天文9年(1540)に義篤の攻撃をうけ、子の竹寿丸とともに自害し、部垂城は廃城となった。絵図中に馬出しがみられるので、戦国時代末期か織豊期の状況を想像して描いたものと思われる。ただし最後の城主・義元の時代にこのような馬出しがあったとは考えにくい。絵図左下には「北条安房守十一代師範 笹沼鋭蔵義英」の銘記がある。北条安房守とは甲州流軍学を大成した旗本・北条氏長を指す。笹沼義英については不明だが、常陸の北条流の軍学者がこの絵図を作成したことがわかる。

2. 部垂義元墓碑

一基／常陸太宮市立太宮小学校蔵／明治15年(1882)／石製／総高130cm

明治15年3月に建てられた部垂城最後の城主である部垂(宇留野)義元の顕彰碑。碑文には部垂の乱が起こるまでの経緯が刻まれている。城橋修理の際、義元の叱責を受けた家臣が佐竹本家に義元の謀反を讒言した。それにより本家の佐竹義篤(義元の兄)が部垂城を攻撃し、義元・小場義実(義元の弟)は自害したとある。撰文は当時県議会議員で後に衆議院議員、茨城日日新聞社長を務めた野口勝一、題額は当時の茨城県令・人見寧による。建立主体については不明。



3. 佐竹義昭奉加帳

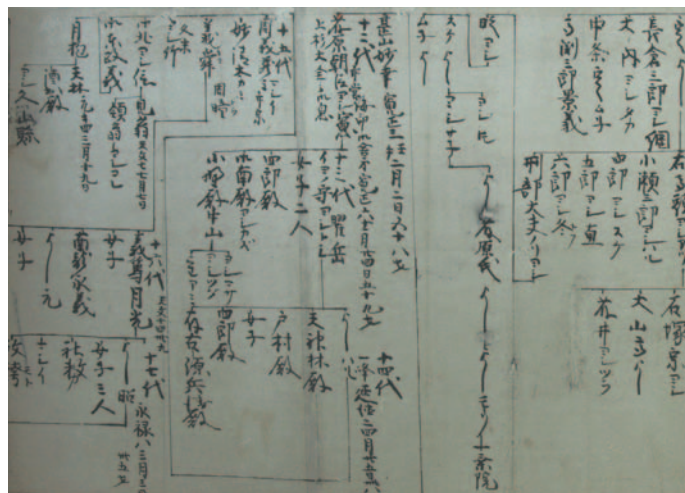
一巻／甲神社蔵／茨城県指定文化財／弘治3年(1557)／紙本墨書／縦25.6cm 横264.8cm

佐竹十八代の佐竹義昭とその家臣が甲神社に奉加を行った際の奉納高と納入者が列記された巻物。甲神社は社伝によると大同2年(807)の創建。佐竹昌義が先祖・源経基の甲を寄進し、興隆したといわれている。部垂城の主郭近くに所在し、部垂城主や家臣たちの信仰を集めた。奉加者には部垂や小場に由縁の深い人物が含まれる。16年前に部垂の乱を鎮めた佐竹義篤の子・義昭が、部垂・小場等の旧臣とともに甲神社に奉加を行うことで、新たな領主としての立場を示す意味もあったと考えられる。

4. 源氏系図

一巻／甲神社蔵／常陸太宮市指定文化財／戦国時代／紙本墨書朱筆／縦29.2cm 横247.5cm

部垂(宇留野)義元が甲神社に奉納したと伝えられる清和源氏の系図。佐竹義重の子義宣が元服する以前であることを示す「御曹子」と表記され、また上杉謙信が輝虎という実名で記されていることから、元亀元年(1570)から天正2年(1574)の間に製作されたものか、その写しと考えられる。佐竹氏以外にも、小場氏・大山氏・江戸氏・長尾氏・鎌倉北条氏・後北条氏の系図が、別途書き出されている。





5. 能面

六面／甲神社蔵／茨城県指定文化財／戦国時代／木製
彩色／(白色尉) 面長20.0cm 面幅13.7cm 面高6.7cm
(黒色尉) 面長19.8cm 面幅14.0cm 面高6.7cm(尉)面長
21.0cm 面幅13.7cm 面高7.0cm(女) 面長20.1cm 面幅
12.9cm 面高6.0cm(天神) 面長21.0cm 面幅15.6cm 面
高8.6cm(女) 面長20.1cm 面幅12.6cm 面高6.6cm

部垂城主の部垂(宇留野)義元が天文3年(1534)に甲神社に奉納したとされる能面。義昭の奉加帳と同時期に奉納されたとする説もある。『新編常陸国誌』には、甲神社の神宝として「能面六面アリ」という記述がある。能は室町時代に観阿弥・世阿弥父子によって大成された仮面劇である。そこで用いられる能面には翁系・奇神系・尉系・怨霊系・女面系・男面系などがある。甲神社の能面はそのうち、奇神系・尉系・女面系である。能楽大成前後の製作で、地方に伝わる作例として貴重である。



甲神社

6. 二股竹

一本／甲神社蔵／常陸大宮市指定天然記念物／戦国時代／竹製／長径134.6cm

天文年間(1532-55)に部垂城主の部垂(宇留野)義元により甲神社に奉納されたと伝えられる二股の竹。根元は1株だが、地上で2株に分かれ生育した突然変異の個体であるため、珍重された。二股竹は縁起物として各地で寺社に奉納されている。一般には子孫繁栄の祈願物とされているので、義元も、一族の繁栄を願って奉納したものと考えられる。



7. ささら獅子頭

三頭／甲神社蔵／茨城県指定文化財／永正14年(1517)／木造彩色／(雄獅子)面幅22.0cm 面奥20.0cm 面高19.0cm(雌獅子)面幅19.2cm 面奥17.0cm 面高15.5cm(雄(角)獅子)面幅18.0cm 面奥16.8cm 面高16.5cm 角長(含埋込)22.0cm

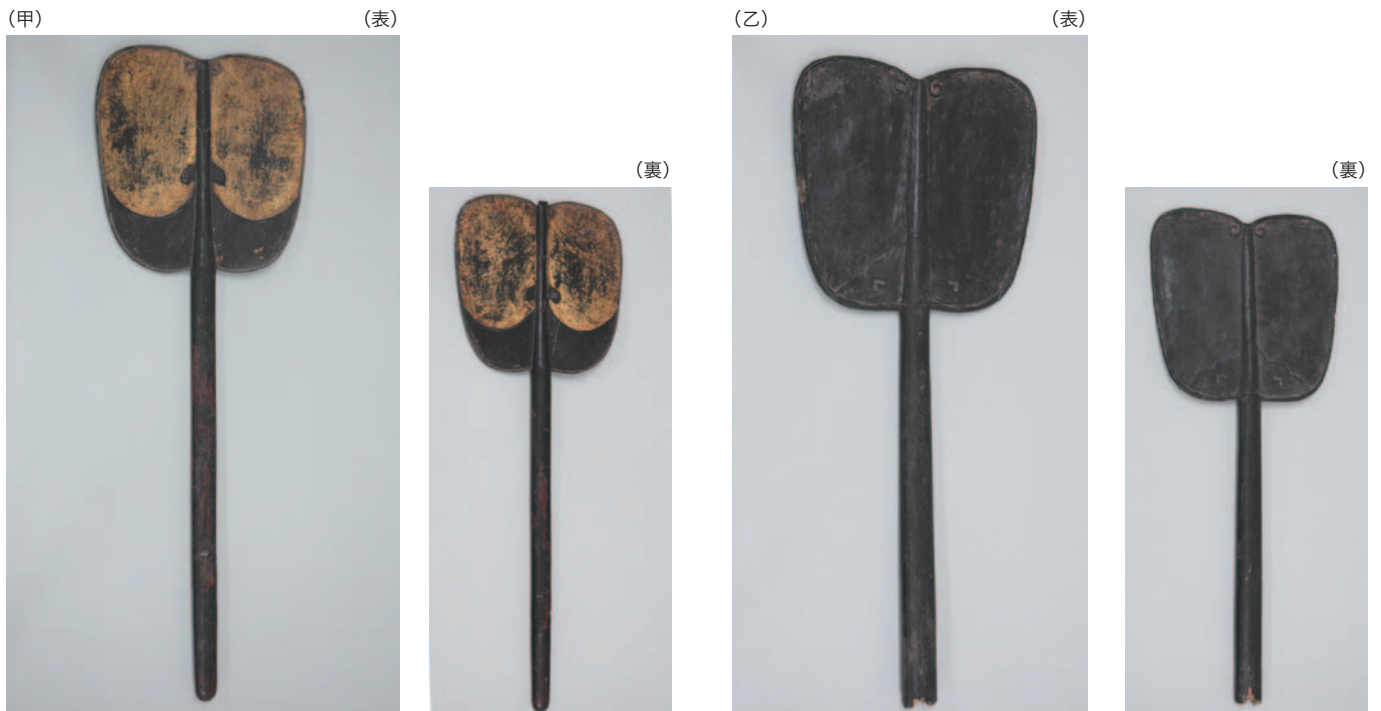
甲神社の所在する下町区に伝来した三匹獅子舞の獅子頭。年代的にみて、部垂城主や有力家臣が奉納したことも推測できる。「ささら」には摺ざさらとびんざさらの二種類がある。関東地方の三匹獅子舞で用いられるのは主に摺ざさらで、先を茶筌状に小割にした竹を右手に持ち、これに左手に持った鋸状に刻みをつけた棒をこすりつけて音を出す。ささら獅子頭は一人ずつが頭上に獅子頭をかぶり三匹で舞う「一人立ち三匹獅子舞」に用いられ、この種の獅子頭としては日本最古の銘文をもつ。「一人立ち三匹獅子舞」の発生について考える貴重な史料でもある。雄獅子に永正14年の銘が残る。



8. 岩瀬与一太郎諫言図絵馬

一面／春日神社（岩崎）蔵／江戸時代／板絵墨画／縦29cm 横38cm

治承4年(1180)、源頼朝に謀殺された佐竹義政の家来・岩瀬与一太郎が、金砂合戦で敗れた後に囚われて頼朝の面前に引き据えられ、涙ながらに同じ源氏の佐竹氏を討ったことを非難・諫言したという、『吾妻鏡』所収の逸話を描いた絵馬。左手の陣屋の中に大紋に烏帽子をつけた頼朝を、前庭に縄をかけられた与一太郎を描く。岩瀬氏は下岩瀬の武士と伝えられ、館跡伝承地(中屋敷)などが残る。岩崎の春日神社にこの絵馬が奉納された理由については不明だが、小貫を本拠地とした武士・小貫氏が、与一太郎の子孫と称した。長禄年間(1457～60)、小貫頼定の時に部垂城攻略に成功した後、享禄2年(1529)、宇留野(部垂)義元に攻められるまでの約70年間、小貫氏は部垂城主としてこの地を支配した。



9. 軍配

二握／日向神社蔵／戦国時代／(甲)木製漆皮金箔塗 (乙)木製漆皮／(甲)長径50.0cm 最大幅17.1cm (乙)長径46.0cm 最大幅18.0cm

宇留野氏奉納の伝承をもつ二握の軍配。日向神社は宇留野城跡に建ち、宇留野氏の氏神を祀る。宇留野氏は、佐竹氏十四代・義俊の四男義公に始まる一族で、宇留野城主となった。義公の子・義久の跡は、再び佐竹氏から十六代義舜の三男・義元が継ぎ、宇留野四郎と称す。部垂の乱で、義長・義元が討ち死にした後は、一族の者が宇留野家を継いだ。いずれの軍配も丸型、比較的小さめの団扇部分を持ち、高い位置に紐穴を備える。当時の肖像画などと照らし合わせてみて、戦国期の作例と判断できる貴重な史料である。(甲)は完形、(乙)は紐通の穴部分より先を欠損するが、ともに団扇部分上に蕨手の装飾を持ち、同じ工房での作製を推測させる。



10. 小場義実墓碑

一基／戦国時代／砂岩製／総高145cm

部垂の乱で自害した小場城主・小場義実の墓碑。風化により銘文の判読は困難である。小場氏は佐竹氏十代義篤の次男・義躬から始まる一族である。小場は、久慈川水運と那珂川水運とを繋ぐ重要な中継地点であった。天文9年(1540)、佐竹義篤(十七代)は部垂(宇留野)義元の部垂城を攻撃したが、そこに居合わせた小場城主・小場義実も戦闘に巻き込まれ自害した。この墓碑は小場義忠が父義実の菩提を弔って天文年間(1532-55)に建立した常秀寺に建てられており、同時期に造立されたものとみることできる。現状は、半折した墓碑を補強するため、別の石材に嵌め込まれている。



11. 小場義実遷墓碑

一基／延享2年(1745)／砂岩製／総高132.5cm

延享2年、小場義実の遺体を部垂から小場村に移した経緯について刻まれた石碑。小場義実が部垂の乱に巻き込まれ自害、小場氏は佐竹本家を憚って義実の遺体を引き取ることができなかったが、延享2年になって、遺骸はようやく村人によって小場村に改葬された。こうした経緯を、銘文として記す。現状では碑の表面はかなり風化が進んでおり、判読できない部分も多い。



12. 烙印「丈」

一柄／常陸大宮市歴史民俗資料館蔵／常陸大宮市指定文化財
／平安時代／鉄製／長径33.0cm 印面縦8.0cm 横8.5cm

上村田小中遺跡から出土した、牛馬の臀部に捺す烙印。官牧で生産された牛馬は、2歳になると所属する牧を示す烙印が捺された。所有者を示す烙印を捺す場合もあった。印面の「丈」という文字から、丈部一族に関係する牧の存在を想像することができる。同じく上村田小中遺跡からは、「丈」の墨書を持つ土器が、小野中道遺跡からは、「丈永私印」の銅印が出土しており、古代、この辺りに丈部氏の勢力が展開していたことを示す。烙印は全国的に見て出土例が数少なく、また従来から牧を基盤として武士が成長したことが論じられており、この地域の中世成立史を考える上で貴重な史料といえる。

13. 雪村自画像(複製)

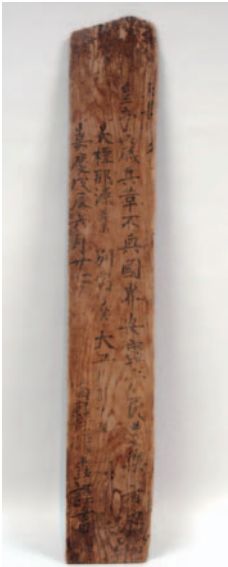
一幅／大和文華館蔵／重要文化財／戦国時代／紙本墨画淡彩
／縦65.2cm 横22.2cm(以上は現物のデータ)

室町時代の画僧・雪村周継自賛の自画像。雪村周継の生涯は不明な点が多いが、15世紀の末頃、部垂郷に生まれたとされる。佐竹氏一族の長子であったが廃嫡されたため、佐竹氏の菩提寺である増井(常陸太田市)の正宗寺に入り、禅僧となった。水墨画をよくし、常陸・三春・鎌倉・小田原などを転々としながら100点以上の絵画を残した。市内下村田に「雪村筆洗いの池」や居宅跡の里伝が残っており、この地を領有した宇留野氏との関係を想定する説もある。本図は如意を手に、膝椅子に座するという僧体の自画像。その風貌、背景の雪山、椅子に掛けた鹿革等は独創的である。



II 美和地域

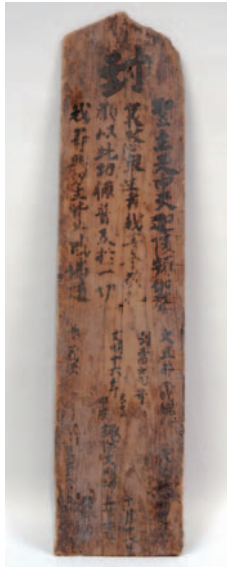
山城とその出城、根小屋、宿、それを囲む河川、城主を護る氏神等々、高部館とその周辺は、これらすべての要素を今日に伝える貴重な歴史的景観として注目される。高部諏訪神社や鷺子山上神社・吉田八幡神社の棟札は、この地の国人・土豪たちの厚い信仰の証でもある。河内館と鷺子宿、三浦大介の妖狐退治伝承など、中世史を考える素材には事欠かない。



14. 棟札

一枚／諏訪神社(高部)蔵／常陸大宮市指定文化財／嘉慶2年(1388)／木製墨書／全高75.2cm 上幅13.0cm 下幅11.0cm

諏訪神社の社殿修造にともなって奉納された棟札。当社は高部館の城主・高部氏の氏神として祀られてきた神社で、高部氏が代々神主を務めてきたといわれており、現在、本品を含めて16点の棟札を所有している。墨書に「嘉慶戊辰六月廿七日」「諏訪宮上下御祈所」「修造」などとあり、茨城県地方で最古の棟札の一枚である。「大檀那源義高」(表)、「大檀那信濃守源義□(高力)」(裏)と記されている人物は、おそらく高部氏の一族であろう。他に別当や大工の名を記す。



15. 棟札

一枚／諏訪神社(高部)蔵／常陸大宮市指定文化財／文明16年(1484)／木製墨書／全高63.5cm 上幅16.0cm 下幅16.0cm

諏訪神社の社殿修造にともなって奉納された棟札。墨書を見ると、「文明十六年(大才甲申)諏訪大明神上吹(葺)再興」とあり、社殿の修造にともなって奉納された棟札であることがわかる。「大檀那義綱」「井義次」と記されるのは、いずれも高部館の城主・高部氏の一族と思われる。他に別当や大工・鍛冶の名を記す。



16. 棟札

一枚／諏訪神社(高部)蔵／常陸大宮市指定文化財／永正17年(1520)／木製墨書／全高49.5cm 上幅15.7cm 下幅15.7cm

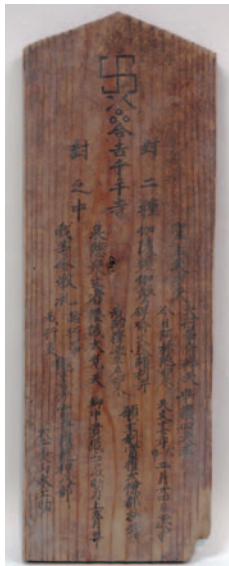
諏訪神社の社殿修造にともなって奉納された棟札。「大檀那」として墨書される「高部駿河守義広」は高部館の城主・高部氏、「檀沢越後守義定」も高部氏の庶流・檀沢氏の一族と思われる。他に住持や勧進僧、大工の名を記す。



17. 棟札

一枚／諏訪神社(高部)蔵／常陸大宮市指定文化財／天文8年(1539)／木製墨書／全高49.5cm 上幅16.0cm 下幅16.0cm

諏訪神社の社殿修造にともなって奉納された棟札。「大檀那」としては「大縄義透」「小室新三良宗次」の両名がみえる。大縄義透は、この年に佐竹義舜から「高部・小舟之者」を率いて常陸・下野の「国境」の警固にあたるように命じられた、大縄左京亮の可能性が有る。小室宗次は、下檀沢館に拠った小室氏の一族と思われる。これとは別に「義篤御代也」として「小室丹後守宗貞」の名が記される。「義篤」とは本家の当主・佐竹義篤であり、地元土豪・小室氏を代官に立てて、勧進に参加したのであろう。



18. 棟札

一枚／諏訪神社(高部)蔵／常陸大宮市指定文化財／天文17年(1548)／木製墨書／全高49.5cm 上幅19.4cm 下幅18.7cm

諏訪神社の社殿造営にともなって奉納された棟札。「願主」として諏訪神社の別当「権大僧部弘弁」の名がみえる。16、17も同様であるが、「郷中貴賤上下」の助力についても書き込まれており、こうした造営が、広く高部郷の人々の喜捨を集めて、執り行われたことがわかる。大工長山木工助は、小瀬立野神社の棟札33、34(貞宗)、36(貞次)にもその名が記されている。他に長山姓を名乗る大工が、16、17、40にみえる。長山氏を称す大工集団がこの時期、高部や小瀬で活動していたことが示している。



諏訪神社(高部)



19. 高部景義墓

一基／個人蔵／常陸大宮市指定史跡／室町時代初期／石製／全高 113.0cm 最大幅 40.0cm

高部氏の始祖・景義の墓と伝わる宝篋印塔。高部氏は、佐竹氏七代・義胤の五男景義に始まる一族で、高部館の城主となった。南北朝時代、高部景義は、佐竹氏とともに北朝に与し、南朝方の楠木正家や那珂氏と戦った。やがて高部本家は、諏訪神社の別当を勤めるようになり、一族の檜沢氏が高部氏を称するようになる。石材は花崗岩と思われ、全体的に風食が進んでいるものの、反りのある笠部の隅飾突起や上下の段級など、室町時代初期の宝篋印塔にみられる特徴をよく表す。

21. 浄因寺旧蔵梵鐘

一口／ひたちなか市華蔵院蔵／茨城県指定文化財／暦応2年(1339)／銅製／総高117.0cm 口径69.0cm



上檜沢にあった浄因寺が旧蔵していた梵鐘。銘文から、暦応2年9月25日に「大檀那式部丞源義長」が、「浄因禅寺」に梵鐘を寄進したことがわかる。「源義長」は北酒出氏を名乗る佐竹氏の一族であり、佐竹氏が鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて、高部や檜沢の地に勢力を及ぼしていたことがうかがえる。この銅鐘を铸造した「大工円阿」は、暦応4年に陸奥国新宮熊野神社(福島県喜多方市)の銅鉢(国指定重要文化財)を、貞和2年(1346)に同国伊佐須美神社の八幡宮御正体(現品は亡失)を制作しており、阿武隈山地一帯で活動していた鋳物師であった。高部・檜沢の地域と南奥州との交流を示す、興味深い事例でもある。



20. 高部村絵図「宿・背戸田・沢口」(天保検地絵図)

一冊／個人蔵／弘化2年(1845)／紙本淡彩／縦38.7cm 横22.2cm

水戸藩天保検地(天保13年〈1842〉縄打ち終了)の後に作成された絵図。表紙に「弘化二年巳十一月那珂郡高部村田畠絵図」とあり、「式冊之内巻」とあることから、他にもう一冊あったと思われる。縦帳の見開きごとに字切りを収める。地形、集落景観、土地利用などを詳しく描く。高部宿は馬頭と山方とを東西に結ぶ馬頭街道と、高部宿から北上して大子や馬頭に至る道とが丁字に交差する場所に立地する。かつての高部宿は現在の「上町」「下町」「関山」の3地区一帯に町場が展開していた。高部館との位置関係からみて、近世の高部宿は、その構えの中に包摂されていた城下集落に起源をもつ町場と考えられる。



22. 江戸新五郎墓碑

一基／常陸大宮市指定史跡／文化6年(1809)／自然石陰刻銘／総高135.5cm 正面上幅28.0cm 下幅42.0cm 側面上幅12.5cm 下幅41.0cm

河内館跡にほど近く、緒川を挟んで鷺子宿の対岸に立つ、江戸新五郎通憲の墓碑。通憲は、慶長7年(1602)、佐竹氏の秋田転封に従った河内城主・江戸通家の子。秋田で病を得て鷺子村に帰り、旧臣小林重広・広義父子のもとに身を寄せ、寛永19年(1642)に生涯を終えた。広義より四代を経て広高が、新五郎の墓碑を建てようとしたが、果たせず没したため、曾孫の広安が水戸藩の儒官・村田隆民とともに、文化6年に建立したのが、この墓碑である。自然石の正面に「江戸新五郎之墓」、他三面に銘文を刻む。墓碑の前には6つの土盛りがあり、江戸氏家臣(小林氏か)の墓と伝えられる。

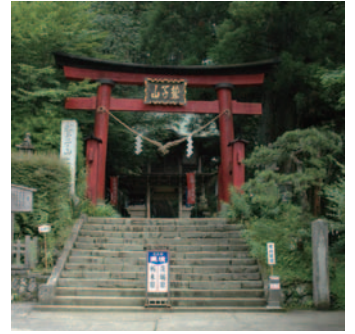


23. 鷺子村絵図「町(宿)・谷津・祢古屋」(天保検地絵図)

一冊／個人蔵／江戸時代後期／紙本淡彩／縦33.4cm 横24cm

水戸藩の天保検地の際に作成された鷺子村検地絵図(全二冊)のうち、「町(宿)・谷津・祢古屋」の部分。天保10年(1839)から同13年にかけて、水戸藩は藩政改革の一環として全領検地を実施した。このとき作成された鷺子村絵図全三冊のうち、現存するのは二冊67丁。図中に示された「祢古屋」は、戦国期、河内館(鷺子館)に伴って構築された根小屋に由来する小字と考えられる。「町(宿)」は、近世の鷺子宿で、長地型の地割が馬頭へ抜ける街道の両側に展開している。これらはおそらく戦国期まで遡る景観であり、河内館の江戸氏が、根小屋を介して鷺子宿を保護下に置いていたことを想像させる。

(表)



鷺子山上神社

(裏)



24. 棟札

一枚／鷺子山上神社蔵／栃木県指定文化財／天文21年（1552）／木製黒漆塗朱書／総高58.8cm 肩高4.8cm 上幅36.5cm 下幅37.2cm

常陸国那珂郡と下野国那須郡との境界の鷺子山上に鎮座する鷺子山上神社の、天文21年の社殿再興の際に上げられた棟札。大旦那として江戸右近大夫通直と武茂守綱の名が併記される。江戸通直は常陸国側山麓の那珂郡鷺子村の土豪で河内館を拠点とする。そのため左側に「河内殿」と注記されている。鷺子江戸氏は水戸城を攻略した江戸通房の庶子道治に始まるが、早くから佐竹氏に従っていた。武茂守綱・同中城式部大輔は、宇都宮氏の一族で、下野国側山麓の那須郡武茂郷（栃木県那珂川町）の領主。この頃佐竹氏と結んでいた。両国にまたがる信仰圏を形成する鷺子山上神社の社殿造営が、両山麓の領主により行われていることが興味深い。

(表)



(裏)



25. 棟札

一枚／鷺子山上神社蔵／元亀2年（1571）／木製墨書／総高57.2cm 肩幅6.3cm 上幅32.4cm 下幅32.5cm

鷺子山上神社の鳥居が下野武茂郷（栃木県那珂川町）側で造営された際に作成された棟札。大旦那として武茂城主・武茂守綱と河内館の城主・江戸上野守の名が並んで記されており、24同様、常陸・下野両国境界の鷺子山に鎮座する同社が、鷺子村・武茂郷双方の領主から保護を受けていたことを示す。さらにこの時代、鷺子山上神社が阿弥陀如来の垂迹と考えられていたこと、別当の他に本願が置かれ社殿の管理に当たっていたことなどもわかる。

(表)



(裏)



26. 棟札

一枚／鷺子山上神社蔵／元亀4年（1573）／木製墨書／総高54.3cm 肩幅6.3cm 上幅29.8cm 下幅29.9cm

鷺子山上神社の井垣（斎垣）が下野武茂郷（栃木県那珂川町）側で造営された際に作成された棟札。造営の大旦那として武茂守綱の名が記されている。下野側の那須郡武茂郷の領主・武茂氏の当社への信仰を示す。25、26においては、常陸側の鷺子郷の領主・江戸氏も、大旦那として造営主体となっていた。なお鷺子山上神社は、宝珠上人が阿波国の天日鷲命（忌部神社）を勧請したことに起源するという。近世にかけて製紙の神として広く両国にわたる信仰を集めた。



27. 善念房像

一軀／善徳寺蔵／江戸時代前期／寄木造 肉身部彩色 衣部古色／像高35.8cm

鷺子宿に接して所在する善徳寺に伝わる、同寺開山・善念房の坐像。善念房は、親鸞の弟子、二十四輩の一人であるが、その出自は佐竹秀義の子の南酒出六郎義茂であるという。善徳寺は、建保元年（1213）、善念房が南酒出郷（那珂市）に建てた一寺で、三世善明の時、現在地に移転したと伝えられる。佐竹氏所縁の寺院の鷺子移転は、鎌倉期における佐竹氏勢力の広がりを考える上で興味深い。なお、善徳寺は、その後、延徳元年（1489）に火災にあい、寛永7年（1630）に再建されている。

(表)



(裏)



28. 棟札

一枚／吉田八幡神社蔵／元禄3年(1572)／木製墨書／全高53.0cm 肩高6.5cm 上幅14.0cm 下幅9.5cm

八幡神社の社殿修造にともなって奉納された棟札。吉田八幡神社は、元禄8年(1695)以前は八幡神社。当社は小田野に所領をもったと伝承される三浦氏所縁の神格とされるが、佐竹一族・小田野氏の氏神として祀られた可能性が高い。墨書を見ると「大旦那(那)」の傍らに「小田野」と記されており、これは小田野館の城主である小田野氏と考えられる。小田野氏は、佐竹貞義の七男で山入城主となった山入師義の三男・自義に始まり、天正18年(1590)に四代義安が田谷城(水戸市)に移るまでの間、小田野村を治めた。

(表)



(裏)



29. 棟札

一枚／吉田八幡神社蔵／慶長2年(1597)／木製墨書／全高75.0cm 肩高6.0cm 上幅18.4cm 下幅17.4cm

八幡神社の社殿修造にともなって奉納された棟札。墨書を見ると「大旦那 義時大縄」とある。天文8年(1539)前後に佐竹家家臣の大縄左京亮が佐竹義篤から常陸・下野の国境の警固を命じられており、「義時大縄」もこの大縄氏の一族かと考えられる。またその傍らの「小田野」は小田野氏のことと考えられる。小田野氏は天正18年(1590)に小田野館から田谷城(水戸市)に移っているが、一族にはこの地に留まった者もあるのだろう。



吉田八幡神社



30. 三浦杉

二株／吉田八幡神社／茨城県指定天然記念物／樹齢約800年／幹囲(男杉)7.75m(女杉)7.45m 樹高40.0m

吉田八幡神社の参道途中にある、三浦大介義明が植樹したという伝承をもつ大杉。久寿2年(1155)、相模国の豪族である三浦義明が三国伝来の九尾の妖狐を退治するのに下野国那須野ヶ原で苦戦している時、吉田八幡神社に祈願したところ、同社の八幡神から一策を授けられて誅伐を果たし、二本の杉を御礼に植えたといわれる。功績により義明は下野国に那須、常陸国に那珂の地を与えられ、やがて小田野に至って草庵を結んだという。妖狐退治の伝説は那須地方に広く分布しており、それが吉田八幡神社や永福寺に伝えられて三浦大介伝説が成立したのであれば、中世の小田野と那須地方との文化的交流を示すことになる。徳川光圀による改称以前は、「鎌倉杉」と呼ばれていた。二本はそれぞれ男杉・女杉と称される。

31. 不動明王像

一軀／三浦神社蔵／常陸大宮市指定文化財／室町時代／一木造 彩色／像高50.0cm

小田野村の三浦大介伝説と関連する三浦神社に伝来する不動明王の立像。空智上人によって開山された永福寺(藤福寺)に収められた像と考えられる。背面に「不動明王壹軀并三浦氏所持弥陀・観音・勢至三尊、修飾以寄彼寺院 元禄之年源光圀(印)」の銘があり、光圀によって不動明王像を含む三尊の仏像が、修理の上、寄進されたことがわかる。左前膊部と右肘先は後補であり、この時の修復か。寺院整理によって永福寺は破却されたが、跡地に建てられた藤福寺に、徳川光圀自ら保護を与えたことになる。



32. 空智上人像

一軀／三浦神社蔵／常陸大宮市指定文化財／室町時代／寄木造 彩色／像高81.7cm

永福寺の開山と伝えられる空智上人の坐像。当地では空智上人の俗名を三浦大介義明と伝える。義明の子の義澄、あるいは義明の曾孫の基安との伝えもある。三浦氏は相模国三浦半島を拠点とし、源頼朝の幕府創立を助けた有力な武士である。伝説によれば、義明は妖狐退治のち小田野に至り「三ッ窟(みつくぼ)」に草庵を結んだのち、永福寺を建立したとされる。永福寺は徳川光圀の寺社改革の際に破却され、跡地に藤福寺が引寺され、三浦神社に継承された。法衣に袈裟を掛け、両手を膝上に置き、両掌を上に向け、左手を下に合わせて坐す。後世の補彩がみられる。

Ⅲ 緒川地域

部垂・高部・山方・長倉・野口等、諸方面に通じる街道が一点に集る地点を、小瀬氏は、小瀬館を中心に、小瀬ゆうがい山城・小瀬高館を築いて押えている。その氏神・立野神社に残された棟札には、小瀬一族がその名を留めている。常陸・下野双方から信仰を集める松倉山には、大岩城主寄進の聖観音像が伝来している。

(表)



(裏)



33. 棟札

一枚／天文18年（1549）／木製墨書／総高75.7cm 肩高3.2cm 上幅23.5cm 下幅23.7cm／立野神社蔵

白幡八幡神社を修造するにあたって奉納された棟札。表には大旦那（小瀬）義員、同旦那長山長門守員永、鍛冶吉澤内匠助、大工長山空助の名が記されている。小瀬義員は小瀬館の城主の小瀬氏。裏には造営の際に「乱故くわんしん不申候」「八幡のまつり田三年をかりられ候」と戦乱が続いたため「勸進」ができず「祭田」を借りたなどと記されている。「乱」とは、部垂の乱にかかわる小瀬での戦闘であろう。その脇には修造資金を20文ずつ提供した人名や村名が記されている。白幡八幡神社は、佐竹氏の一族である小瀬氏の氏神として開創されたものと考えられる。中世には、西目鹿島神社と相殿（同じ社殿に2柱以上の神を合わせ祀ること）となっていたが、後に東方の立野山腹にあった立野神社を合祀して小瀬の惣鎮守となった。

(表)



(裏)



34. 棟札

一枚／天文18年（1549）／木製墨書／総高76.4cm 肩高3.3cm 上幅24.5cm 下幅23.6cm／立野神社

白幡八幡神社遷宮にともなって奉納された棟札。表には常州佐竹小瀬白幡大明神と神号が記され、その下に大旦那（小瀬）義員と、鍛冶吉澤内匠助と大工長山空助員宗、さらに旦那長山長門守の名が記されている。小瀬義員は33にも登場する小瀬館の城主の小瀬氏。裏には「下小瀬之さうし之事」として、遷宮式にともなう掃除役を定めている。この場合、「下小瀬」とは、その下に記されている14の集落、すなわち上小瀬の南半分を占める下郷一帯のことかと考えられる。掃除役は、「一はん」（一番）練貫から十四番にあたる入山、および十五番にあたる岡崎日向（人名）までのローテーションにより行われたことがわかる。

(表)



(裏)



35. 棟札

一枚／立野神社蔵／永禄11年（1568）／木製墨書／総高82.5cm 肩高4.9cm 上幅14.6cm 下幅16.8cm

白幡八幡神社の修造にあたって奉納された棟札。表には、大旦那（小瀬）義春、同旦那長山大炊助、大工塩澤空助、鍛冶東野岡崎西丞の名が記されている。小瀬義春は小瀬館の城主・小瀬氏の当主である。裏には「たひきりの人数之事廿六人也」「万匠之人数之事六十人に而納也」と、修造にかかわった人々について記されている。遷宮（修造）の費用は小瀬中の勸進でまかになったとされる。下小瀬の神役としての掃除は、34と同じく、練貫から入山、岡崎日向守までの順役で行ったことがわかる。

(表)



(裏)



36. 棟札

一枚／立野神社蔵／天正7年（1579）／木製墨書／総高78.3cm 肩高4.5cm 上幅16.8cm 下幅16.8cm

西目鹿島神社の屋根葺き替えにあたって奉納された棟札。表には上葺きの関係者として、大旦那義次、御代官荻窪肥後守、旦那阿久津大隅守、大工李助員次、鍛冶石塚縫殿助、祢宜五郎左衛門の名が挙げられている。義次は小瀬氏系図にはみえず、「ツク」と振り仮名まで付けられているので、小瀬氏以外の武士かもしれない。また御代官荻窪肥後守については佐竹氏の代官とみられる。裏面に掃除役を担う上小瀬郷の12の集落名が記されており、この小瀬郷北部一帯が佐竹氏所であれば、荻窪氏はその代官であろう。小瀬郷の南部は小瀬氏の支配地ということとなる。

(表)



(裏)



37. 棟札

一枚／立野神社蔵／天正13年（1585）／木製墨書／総高67.3cm 肩高5cm 上幅14.2cm 下幅14.7cm

白幡八幡神社の鳥居造営にあたって奉納された棟札。表には造営関係者として大旦那（小瀬）義行、鍛冶岡崎日向、大工温澤□□、少旦那長山隼人佐の名が記されている。この大旦那義行は小瀬館の城主の小瀬氏である。神社名については特に記されていないが、棟札の形式からみて、白幡八幡神社に関する棟札と考えられる。

(表)



(裏)



38. 棟札

一枚／立野神社蔵／天正16年（1588）／木製墨書／総高44.6cm 肩高1.5cm 上幅9.5cm 下幅9.8cm

天正16年11月の白幡八幡神社での神楽一座執行にあたって奉納された棟札。この神楽一座を興行した大願主・久衛門は、小瀬郷内の有力者であろう。その右には三戸神主、静神主と記されている。静神社は常陸三ノ宮、三戸神社は水戸明神ともいい水戸台地（水戸市）の先端に祀られていた。中世、両社が神楽興行にかかわりをもっていたことがうかがえる。この年の12月、江戸氏内部の抗争である神生の乱が起きているが、緊迫した情勢の下で江戸・佐竹領双方の神主を招いたとみられる。

(表)



(裏)



(表)



(裏)



立野神社

39. 棟札

一枚／立野神社蔵／文禄3年(1594)／木製墨書／総高70.6cm 肩高2.7cm 上幅14.6cm 下幅14.6cm

白幡八幡神社の法案所の修造にあたって奉納された棟札である。法案とは神仏に芸能などを奉納することであり、法案所はいわゆる神楽殿のことである。修造関係者としては大旦那(小瀬)越中守義行、助力請衆、小旦那長山隼人等が記されている。越中守義行は小瀬館の城主。天正18年(1590)には、伊達政宗との奥州滑津の合戦で奮戦し政宗にもその名を知られた。この時、佐竹義重より感状を賜っている。小旦那の長山隼人は33・34の長山長門守員永、35の長山大炊助の系譜を引く者で、小瀬氏の宿老クラスの武士であろう。その他、助力請衆として資金を提供した人々を一括して記している。

40. 棟札

一枚／立野神社蔵／文禄年間／木製墨書／総高47.3cm 肩高2.0cm 上幅11.0cm 下幅11.0cm(縦割れ右半分のみ)

白幡八幡神社の斎垣造営にあたって奉納された棟札。斎垣とは忌垣とも書き、神社など神聖な場所の周囲にめぐらした垣のこと。造営関係者として大旦那(小瀬)越中守義行、奉行山崎蔵人、祢宜和泉守、大工長山新十郎、鍛冶堀江忠介が記されている。越中守義行は小瀬館の城主の小瀬氏。奉行山崎蔵人は斎垣の造営を担当した小瀬氏配下の武士であろう。この棟札は年記の部分が割れて失われているが、39と同じく大旦那に小瀬義行の名があるので、文禄3年(1594)頃のものと考えられる。



松倉山観音堂



41. 木造地蔵菩薩像

一軀／江畔寺蔵／常陸大宮市指定文化財／室町時代／一木造 彩色／全高46cm

小瀬館の城主・小瀬氏の菩提寺・江畔寺に収められている地蔵菩薩坐像。一木造で、玉眼が嵌入され、もとは彩色されていた。輪光の光背を付け蓮華の台座の上に結坐し、着衣の上に袈裟をまとい右手に錫杖を持ち、左掌に宝珠を乗せている(左手首、錫杖、宝珠は後補)。小瀬氏初代義春は、康永3年(1344)に剃髪入道して、ここに小庵を建てて住んだ。三男孝繁(法名悟真妙頓)の師・夢窓疎石を開山、悟真妙頓を二世として、義春の長男義益が観応元年(1350)に開基し、江畔寺を創建した。境内愛宕山上の愛宕神社は応永元年(1394)の勧請。元禄6年(1693)、徳川光圀は江畔寺に古作の地蔵菩薩像を寄進しており、それが本像であろう。



42. 聖観音像

一軀／松倉山観音堂蔵／栃木県指定文化財／応永2年(1395)／一木造／像高188.5cm

栃木県那須烏山市大木須と同県茂木町山内の境界にある松倉山山頂の観音堂に本尊として安置される立像。他に聖観音像一軀、十一面観音像二軀、観自在尊像一軀があり、三軀に墨書銘がある。本像は五軀中最も古い応永2年の作で、その胎内銘から大岩治部小輔入道普藤が大檀那となって寄進したことがわかる。大岩治部小輔は旧緒川村大岩にある大岩城を居城とした大岩氏と考えられるが詳細は不明。松倉山は下野国の那須郡側の信仰を集めており、鷲子山上神社などと同様、中世における国境をまたいだ信仰圏を確認できることも興味深い。本像は一木から彫出された重厚な像で、五軀のうちでも秀作といえるが、慶長18年(1613)の火災により両腕の肘先が欠失し、全体に焼損がみられる。

IV 山方地域

佐竹氏の有力な一族・東氏が入る山方城は、久慈川の断崖上で南郷街道を押さえる規模の大きな城郭である。高館と御城という二つの核をもつこの城は、山方宿の成立にもかかわる歴史を秘めている。対岸の西野内古館は山方城とともに久慈川を押える城であろう。周辺の旧家には、佐竹氏に関する古文書が数多く伝来する。



43. 山方城跡出土遺物

10点／常陸大宮市蔵／かわらけ3点（完形1破片2）①口径9.5cm 底径5.2cm 器高3.0（最大）②口径（11.8cm）底径（6.4cm）器高2.7cm（残存高）③口径（8.2cm）底径（4.8cm）器高2.0cm（残存高）／施釉陶器1点 口径（8.0cm）高台径（5.6cm）器高2.5cm（残存高）／古銭5点（洪武通宝）直径2.3cm（至大通宝）直径2.3cm（口祐通宝）直径2.4cm／墨書石1点 長径11.5cm 幅5.6cm

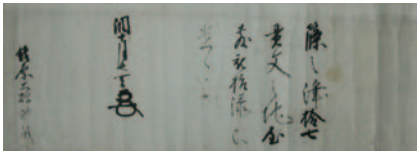
御城の展望台（展望櫓）建設にともなう山方城跡発掘調査時に出土した遺物。内訳は、かわらけ、陶器片、古銭、墨書の河原石、鉄製品である。かわらけは、完形品が1点と破片などが2点出土している。いずれもロク口成形で、点数が少ないため時期を確定できないが、中世の遺物とみて良いだろう。陶器片は底部を半分残した端反皿で、見込み部には梅の印花文がみられる。時期的には大窯期、16世紀初頭のものと考えられる。古銭は破片を含め6点出土し、中国の至大通宝（元時代）、洪武通宝（明時代）、口祐通宝などである。墨書石には「壬申 辰星七難即□」「守護□□」という文字が書かれ、祈祷に係するものであるうか。戦国期の壬申の年は、永正9年（1512）か元亀3年（1572）である。鉄製品はサビで膨張しており詳しいことはわからないが、鍛冶場の存在をうかがわせる。



44. 五輪塔

一基／常安寺蔵／常陸大宮市指定文化財／安土桃山時代／石造／総高187cm 最大地輪幅77cm

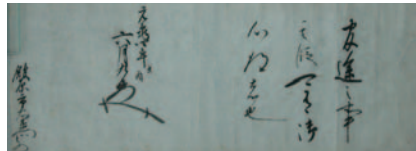
この五輪塔は鹿島清秀の墓（もしくは供養塔）と伝えられている。天正18年（1590）8月1日に佐竹義宣は豊臣秀吉から常陸等の支配を認められると、翌年2月9日に鹿島・行方郡の城主らを太田城に呼び出し謀殺した。この時、鹿島神宮惣大行事の鹿島城主鹿島清秀は、鹿島郡領主となった東義久（山方城主）に一時預けられた後、山方城下において殺害された。この五輪塔はもとは常安寺の北側から嘆願橋へ下る五輪坂の傍らに建てられていたが、大正11年（1922）に水郡線開通による工事で常安寺入口脇に移された。常安寺の場所には、文和4年（1355）、山方城主（山縣氏の初代頼重か）により建てられた白馬寺があったが、永正16年（1519）、東政義（東家初代）が父佐竹義治の位牌所とした後、文禄元年（1592）に東義久が石塚村（城里町）に移した。その跡に佐竹義重が父義昭の法号から寺号をとり、常安寺を建立した。



45. 東義堅知行宛行状

一通／個人蔵／立原家文書／年不詳／紙本墨書／縦32.4cm 横46.8cm

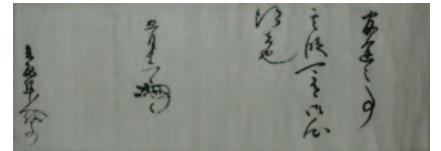
東義堅（政義の子）が閏10月24日に館原（立原）大炊助に与えた知行宛行状。野上村の内篠之沢17貫文の地と屋敷を与えたものである。同家の系譜によれば、立原氏は常陸平氏の流れを汲み、代々佐竹氏の家臣であったという。元禄13年（1700）同家は古文書を徳川光圀側近の井上玄桐に提出したところ、証文として認められ一軸に仕立てられて戻され、その上で由緒書を作るよう命ぜられたという。



46. 酒出義久官途状

一通／個人蔵／立原家文書／元亀4年（1573）／紙本墨書／縦32.4cm 横50.4cm

元亀4年（1573）6月9日に酒出義久（東義堅の次男、のち東義久）が館原（立原）市右衛門に与えた官途状。同家由緒書によれば、市右衛門は立原大炊助の子で弥市郎といったが市右衛門と改名して、家督を相続し20貫文の地を知行した。佐竹家の家臣・佐川新三郎が佐竹義宣の命に背き出奔した時、立原弥市郎と岡崎豊後がこれを討つよう命ぜられた。弥市郎と豊後とで先後の争いがあったが、義宣は先太刀は弥市郎と認めてこれを賞したという。



47. 東義久官途状

一通／個人蔵／立原家文書／安土桃山時代／紙本墨書／縦32.4cm 横49.5cm

5月12日に「佐竹一家」の東義久が立原隼人佐に与えた、年末詳の官途状。同家由緒書によれば、立原隼人佐は46の市右衛門にあたる。



48. 佐竹義重感状

一通／個人蔵／益子家文書／天正18年（1590）／紙本墨書／縦16.2cm 横42.4cm

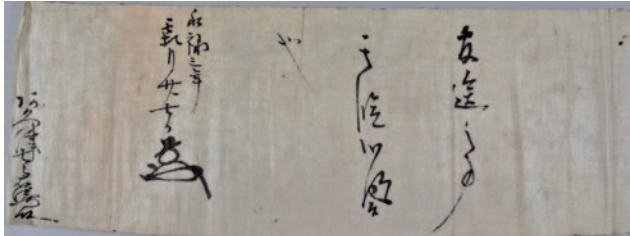
天正18年12月19日に佐竹義重が益子兵部に与えた感状。この日、佐竹義重は水戸城主江戸重通を攻撃し落城させたが、そこでの益子兵部の戦功を称え官途名を授けたものである。益子家は同家の系譜によれば大掾氏の出身で鹿島郡の徳宿館（鉾田市）に居住していた。応永29年（1422）徳宿常幹は江戸氏と戦って敗れ、那珂郡益子に住み益子氏と改姓し、永享2年（1430）に長沢村に移り土着した。その六代後の益子兵部広幹は天正8年9月3日佐竹義重により太田城に呼び出され家臣となったという。



49. 佐竹義重感状

一通／個人蔵／金子家文書／天正18年（1590）／紙本墨書／縦16.2cm 横41.8cm

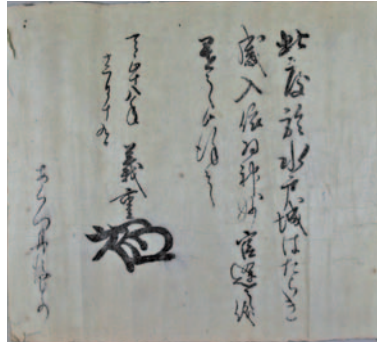
天正18年12月19日に佐竹義重が金子勘解由に与えた感状。この日、佐竹義重は水戸城の江戸氏を攻めて落城させたが、そこでの金子勘解由の働きを賞し官途名を授けたものである。金子家は、その系譜によれば、桓武平氏の流れを汲み、武蔵国金子荘に居住し金子氏を称したという。後に四代の金子家房は保元・平治の乱で源義朝に加勢して敗れ、佐竹隆義とともに帰国してその家臣となり、十四代の家順の時佐竹氏の命で佐都東郷（常陸太田市）より那珂東郡寺田郷へ移ったという。



50. 東義堅官途状

一通／個人蔵／坏家文書／永禄3年（1560）／紙本墨書／縦16.1cm 横46.8cm

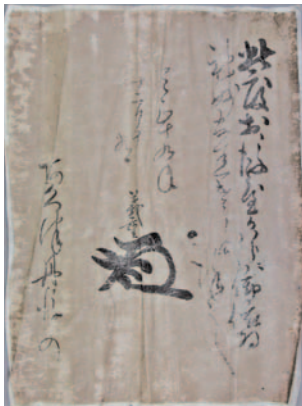
永禄3年11月27日に「佐竹一家」の東義堅が阿久津（坏）七郎右衛門に与えた官途状。坏家はその系図によれば、清和源氏の出身で、源義家の弟義綱の子義頭が初めて阿久津姓を名乗った。その四代義武は、源頼朝の佐竹攻めの時、花園合戦で佐竹氏に味方して戦功を上げた。十七代義時の時に太田郷（常陸太田市）より那珂東郡寺田郷に移住したという。



51. 佐竹義重官途状

一通／個人蔵／坏家文書／天正18年（1590）／紙本墨書／縦26.7cm 横30.1cm

天正18年12月19日に佐竹義重が阿久津丹後に与えた官途状。佐竹義重の水戸城攻撃に加わり戦功をあげ丹後守の官途名を授けられた。佐竹氏の秋田移封後は那珂東郡寺田郷に土着し帰農した。



52. 佐竹義重官途状

一通／個人蔵／坏家文書／天正19年（1591）／紙本墨書／縦23.5cm 横17.8cm

天正19年12月19日に佐竹義重が阿久津丹後に授けた官途状。天正18年の佐竹氏の水戸城攻撃に際し阿久津丹後は後台原で戦功をあげ官途名を与えられた。この文書は、一年後の天正19年、あらためて発給された官途状と考えられる。



53. 常陸国水戸領旧家調

一冊(37丁)／個人蔵／明治17年(1884)／紙本墨書／縦24.6cm 横16.0cm

明治17年、相田三之衛門が影考館にあった「常陸国水戸領旧家調」を写したものの。その内容は中世の武将ごとに家臣の姓と帰農した年代、土着した居村をまとめたものである。江戸時代には有力農民の間で家格を確定するため自らの由緒を追及しようとする動きが生まれた。こうした編纂物が、庄屋の世襲化、寺社の儀式での座格決定など、地域社会秩序の形成に大きな影響を与えたものと思われる。



54. 棟札

一枚／諏訪神社（西野内）蔵／江戸時代／木製墨書／総高66.4cm 上幅22.4cm 下幅21.7cm

文明13年（1481）に西野内諏訪神社の社殿の造営にあたって奉納された棟札。しかし、この棟札は頂部が平型であり、材質も新しく文字の書体も楷書で、呪文や諸仏の名もないので、近世に写されたものとみられる。大檀那は源朝臣国綱と記されている。文明10年（1478）、西野内村成就院が山方城主の祈願所として建てられているので、西野内村はこのころ久慈川対岸の山方城主の支配下にあったとみられる。山方城主の山縣氏は清和源氏の系譜を引き、応永24年（1417）に、山方城主であった山縣三河守海天の孫出羽守の弟僧本仲が還俗しており、これが源国綱に当たると考えられる。



55. 棟札

一枚／諏訪神社（西野内）蔵／慶長12年(1607)／木製墨書／総高77.0cm 肩高4.0cm 上幅22.0cm 下幅25.0cm

諏訪神社の社殿再興にあたって奉納された棟札。大旦那名はないが本願の易叟見悦庵主は地元成就院に關係する僧であろう。「小貫野郷岩井野村」は、元和4年（1618）の徳川頼房黒印状写に「常陸国久慈郡西野内村」がみえるので、慶長12年～元和4年までの間に西野内村と改称したものと考えられる。裏には振舞衆として10人の名が記される。その下には「受領官道（途）之以成功遷宮義敷仕候」とあり、遷宮の資金・資材を提供した有力者の官途名を披露している。



諏訪神社（西野内）

V 御前山地域

佐竹氏の有力支族・長倉氏が居城とした長倉城は、城下の宿が近世の長倉宿に受け継がれ、その趣をよく留めている。長倉陣屋は長倉城の根小屋の立地を継承したものであろう。明治初期の土地利用の全貌がわかる地籍図が残されており、近代以降に改変された景観の復元も可能で、中世城郭と宿との関係を考える好個の事例といえよう。

(部分)



56. 長倉村地籍図

一舗／個人蔵／明治9年(1876)／紙本着色／縦320cm 横371cm

旧長倉村を範囲とした地籍図。地籍図とは明治6年(1873)に発布された「地租改正条例」を受けて行われた改租事業の中で作成された、土地一筆ごとに字名と地番、地目、面積等を記した大縮尺の地図である。長倉城跡を表す「御本城山」、城下の境界を示す「北門」、町場の字名「上町」「仲町」「橋場町」、天保期に置かれた陣屋にかかわる「館旧庭跡」などの地名が書き込まれている。城跡との位置関係から、陣屋跡を、中世に根小屋が置かれた場所と考えることもできる。その中に旧登城道を推定することも可能である。地図の端には「第四大区 六小区 常陸国那珂郡長倉村」とあり、副区長など作成に携わったと思われる7人の名が記されている。中世の町場を引き継いだ、近世長倉村の姿を想像させる貴重な史料である。

(部分)



57. 常陸国図

一幅／茨城県立図書館蔵／文化元年(1804)／紙本彩色／縦105.0cm 横159.5cm

国内の名勝や古跡、その地の旧族の系譜などを描いた常陸国絵図。作者の小島忠利については未詳。城跡の注記の中に「長倉古城」の文字がみえる。翌文化2年には幕府から各藩に領内地誌の調査が命ぜられ、これに応じて水戸藩は文化4年に「水府志料」15巻を提出している。各村の村況や産物、歴史などを記した地誌類の編さんは寛政期頃から盛んになり、文化文政期には官製の地誌類の編さんが進む。本資料もその一連の流れの中で作られた絵図であろう。



59. 大榎

一株／茨城県指定天然記念物／樹齢：500年／樹種：エノキ（ニレ科）／幹囲5.70m 樹高23m

佐竹氏領内境木という伝承を持つ樹木。榎は昔から一里塚などの目標として植えられる。大字中居の個人宅内にあり、那珂郷と朝妻郷の境に位置している。おそらく長倉城を本拠とする佐竹氏一門長倉氏の支配領域を示すのであろう。樹木の根本には「小彦名命大巳貴命水連女命」と書いた石を祀る。またいぼがとれるということで「いぼとり榎」とも呼ばれ、霊木として大切に保護されてきた。現在枯れ始めている個所もあるが、青々と葉をつけ、秋には紅葉する。

58. 徳川斉昭知行宛行状

一通／個人蔵／天保15年(1844)／紙本墨書／縦42.0cm 横57.3cm

徳川斉昭から松平頼譲へ与えられた知行宛行状。水戸藩における天保の改革の最中、斉昭は天保9年に水戸藩主松平頼政の子である頼位に命じて長倉城跡を修復させた。その後、天保15年に水戸家の一族である松平頼譲が、3000石を与えられ長倉陣屋へ入った。系図によると、長倉松平家の始祖である頼泰は徳川頼房の子とあり、頼譲は九代目となる。頼譲の後には頼功一頼導と継承され、明治維新を迎える。知行状にみられる領地は、那珂郡長倉村・茨城郡成澤村（水戸市）・下野国那須郡和見村（栃木県那珂川町）など計11ヶ村で、発給者である斉昭の朱印が押されている。天保15年、禄制改革の実行に伴い、地方知行への切り替えが一斉に行われ、100石以上の諸士は、こうした斉昭朱印状が渡された。

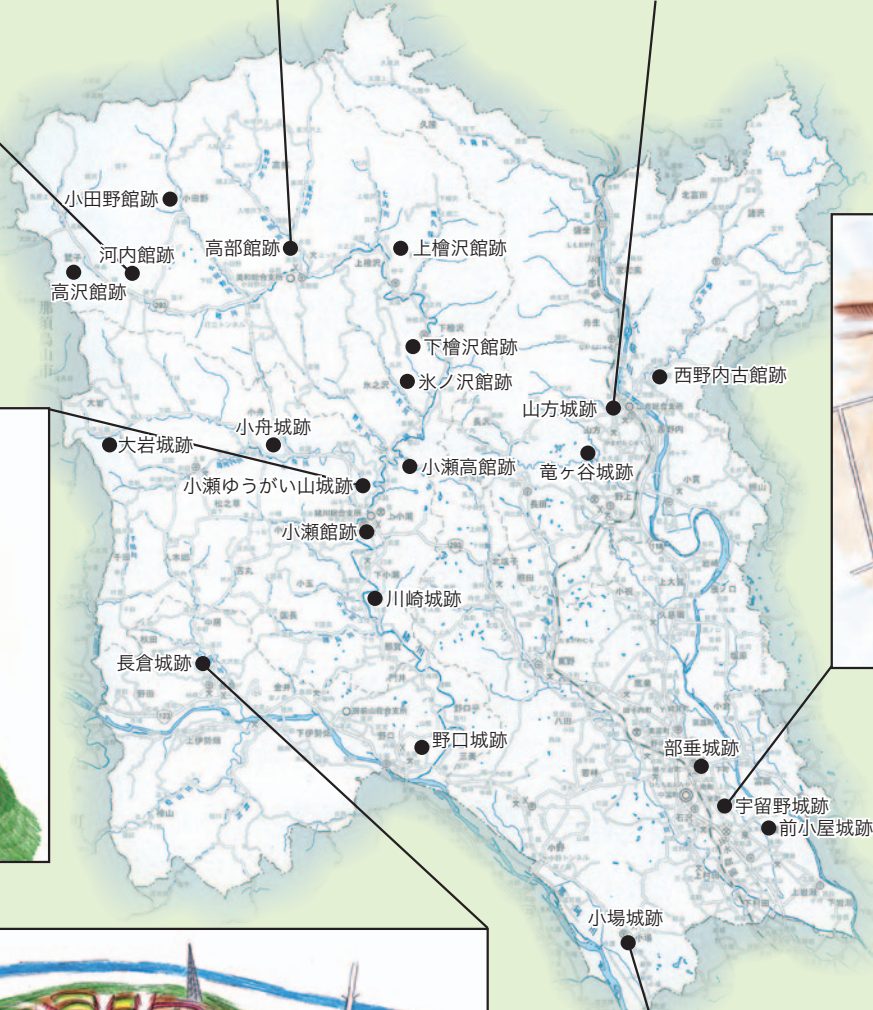
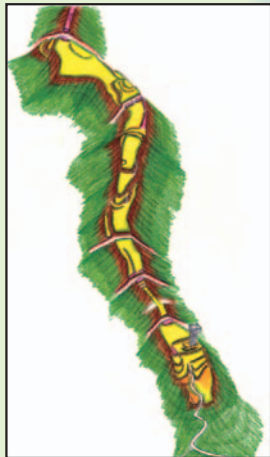
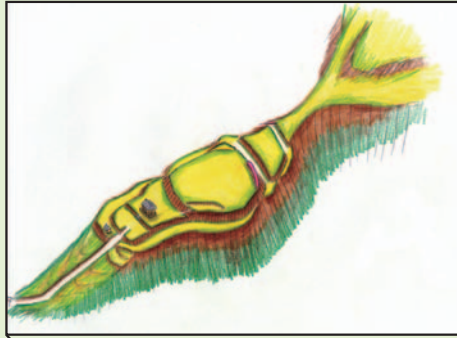
60. 狛犬

一対／佐伯神社／常陸大宮市指定文化財／大永4年(1524)／一木造古色／(阿形)像高45.5cm 奥行24.3cm 最大幅20.8cm (吽形)像高44.5cm 奥行25.2cm 最大幅22.0cm

大永4年、長山頼定が佐伯神社に奉納した狛犬。佐伯神社は大同元年(806)、讃岐の僧・玄海の開基と伝えられる。天正11年(1583)、長倉城へ向かう途中に参詣した佐竹義重は、野口・野口平など10ヶ村の内1004石を社領にあて、さらに天正年中には野口村・大畠村・野口平村の地を寄進したという。阿形上下の歯と眼、吽形の眼には共に漆箔が施されている。阿形底部に「別當法印鏡有 常州那河東野口村佐伯大明神 寄進長山頼定 大永四〔甲申〕九月」、吽形底部に「別當法印鏡有 常州那河東野口村佐伯大明神 寄進之 長山頼定」の刻銘がある。寄進者の長山頼定は、この近辺の土豪であろう。33、34、35、39小瀬立野神社の修造にかかわった長山氏も同族であろう。室町時代の狛犬は、頭部と上体に重きを置くようになり、前時代の躍動感や写実性は失われ、一種の抽象化が進む。佐伯神社の作例にも、こうした時代の作風が感じられる。



常陸大宮市のおもな中世城郭



※ この頁に掲載した図版は、すべて余湖浩一氏が作図したものである。

編集 茨城大学中世史研究会 水戸市文京2-1-1 茨城大学人文学部 高橋修研究室 / TEL 029-228-8120(直通) / E-mail osm@mx.ibaraki.ac.jp
 発行 常陸大宮市歴史民俗資料館(大宮館) 常陸大宮市中富町1087-14 / TEL 0295-52-1450 / E-mail rekishi@city.hitachiomiya.lg.jp
 発行日 平成21年(2009年)10月10日